

お薬のしおり

慢性閉塞性肺疾患(COPD)と肺年齢

No.152 (H26.10)

東京医科大学病院 薬剤部

みなさんは、肺の生活習慣病として“COPD”という疾患を耳にしたことはありますか？ 慢性閉塞性肺疾患（COPD：Chronic Obstructive Pulmonary Disease）のことで、肺への空気の通りが慢性的に悪くなりゆっくりと進行していく疾患で、これまで慢性気管支炎や肺気腫と呼ばれていました。厚生労働省による統計では、日本における2013年のCOPDによる死亡者数は16,443人で、死亡原因の第9位となっており、全体としては増加傾向にあります。40歳以上の日本人のうち10人に1人はCOPDの疑いがあるという報告もなされています。そこで今回は世界COPDデー、COPDの薬物療法、肺年齢についてご紹介します。

世界COPDデーは、2002年にCOPDの研究と啓発に力を注ぐ世界的な組織GOLD（Global Initiative for Chronic Obstructive Lung Disease）の主唱のもとに定められています。今年（2014年）は11月19日で、世界各国で様々な啓発イベントが実施されます。2013年度から開始された「21世紀における第2次国民健康づくり運動（健康日本21（第2次）」プランにおいても、COPDの認知度と理解の向上を目標としています。

主な症状は、体を動かしたときの息切れ、咳や痰が続くなどが挙げられ、その原因の90%以上は喫煙と言われています。たばこなどの刺激で気管支に炎症が起こり、肺胞が破壊されることによって、呼吸がしにくくなります。診断は、スパイロメーターという機械を使った呼吸機能検査（スパイロ検査）によって行われ、肺活量と、息を吐くときの空気の通りやすさを調べます。

現時点ではCOPDを根本的に治し、健康的な肺に戻す治療はありませんが、なるべく早い段階で発見し、治療を開始することで健康状態の悪化と日常生活の障害を防ぐことができます。治療法には、禁煙、薬物療法、呼吸リハビリテーション（呼吸に必要な筋肉（呼吸筋）をストレッチなどでトレーニングすること）などが行われます。さらに重症な場合



には酸素療法や外科療法が行われることもあります。以下に COPD の薬物療法としてよく用いられる吸入薬や内服薬について示します。(かっこ内は当院採用医薬品の名前です。)

●気管支拡張薬

・抗コリン薬 (商品名：スピリーバ、シーブリ) ⇒ COPD の治療において第 1 選択薬として用いられ、吸入してすぐに効果はあらわれませんが、長時間にわたり気管支を広げ、呼吸を楽にする効果があります。但し、緑内障や前立腺肥大症などの排尿障害のある方には使用できません。また、主な副作用として、口の渇き、動悸、嘔吐、むかむかするなどが挙げられます。

・ β_2 刺激薬 (商品名：オンブレス、セレVENT (院外専用)) ⇒ 抗コリン薬と同様に、長時間にわたり気管支を広げ、呼吸を楽にする効果があります。

・ β_2 刺激薬・抗コリン薬配合剤 (商品名：ウルティプロ)

●去痰薬 (商品名：ムコソルバン、ムコダイン、クリアナール)：痰を出しやすくして除去するお薬です。

他にも、COPD の増悪を抑制することを目的として抗生物質や炎症を抑えることを目的としてステロイド薬などが用いられることもあります。

COPD などの呼吸器疾患の予防や早期発見及び治療のために「肺年齢」を参考にすることができます。肺年齢とは、見た目では分からない肺の健康を知るヒントとなるもので、同性・同年代の方と比較して自分の呼吸機能（肺の健康状態）がどの程度にあるのかを知る指標とされています。肺年齢は、呼吸機能検査結果の 1 秒量 (FEV1)、努力肺活量 (FVC) と年齢、身長から計算することができます。肺年齢に応じて、肺の状態を 5 つのグループ (Ⓐ 異常なし、Ⓑ 境界領域 (現時点では異常なし)、Ⓒ 肺疾患の疑い (要精検)、Ⓓ COPD の疑い (要経過観察/生活改善)、Ⓔ COPD の疑い (要医療/精検)) に分類されます。肺年齢が実年齢以上で、Ⓒ や Ⓓ などに該当される方は、医師による精密な検査が必要であるため、できるだけ早く受診するようにしてください。

ご自分の肺年齢を知ることで肺の健康意識を高め、COPD などの呼吸器疾患の予防と早期発見を心がけていきましょう。お薬のことでご不明な点やご不安な点がある場合には薬剤師までご相談下さい。

